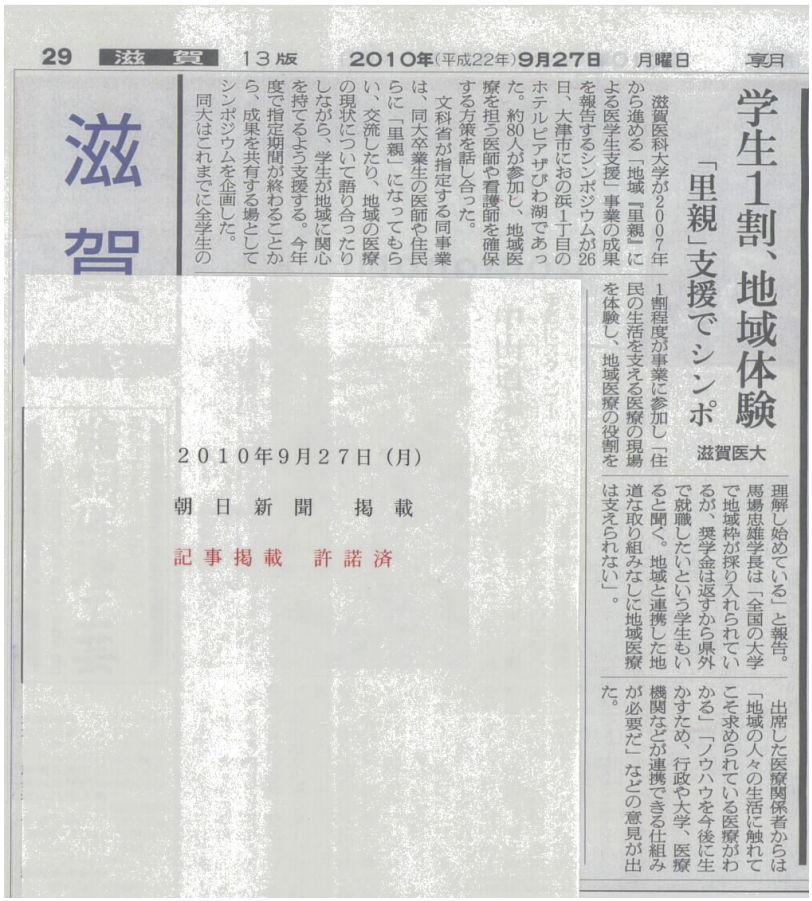
県民公開講座の様子が新聞に掲載されました

2010年10月 5日

９月２６日（日）にホテルピアザびわ湖（大津市）で「滋賀の医療と医師・看護師養成を考える」をテーマとして開催した県民公開講座（「里親ＧＰ」シンポジウム）の様子が朝日新聞に掲載されました。

学長のお話しや出席いただいた方々からのご意見が掲載されています。



29 滋賀 13版 2010年(平成22年)9月27日 月曜日 亨月

滋賀

学生1割、地域体験

「里親」支援でシンポ

滋賀医大

滋賀医科大学が2007年から進める「地域『里親』による医学生支援」事業の成果を報告するシンポジウムが26日、大津市におの浜1丁目のホテルピアザびわ湖であった。約80人が参加し、地域医療を担う医師や看護師を確保する方策を話し合った。

文科省が指定する同事業は、同大卒業生の医師や住民らに「里親」になってもらい、交流したり、地域の医療の現状について語り合ったりしながら、学生が地域に関心を持てるよう支援する。今年度で指定期間が終わることから、成果を共有する場としてシンポジウムを企画した。

同大はこれまでに全学生の1割程度が事業に参加し「住民の生活を支える医療の現場を体験し、地域医療の役割を理解し始めている」と報告。

馬場忠雄学長は「全国の大学で地域枠が採り入れられているが、奨学金は返すから県外で就職したいという学生もいると聞く。地域と連携した地道な取り組みなしに地域医療は支えられない」。

出席した医療関係者からは「地域の人々の生活に触れてこそ求められている医療がわかる」「ノウハウを今後に生かすため、行政や大学、医療機関などが連携できる仕組みが必要だ」などの意見が出た。

２０１０年９月２７日（月）

朝 日 新 聞　掲 載

記事掲載　許諾済

宿泊研修での往診同行の様子が新聞に掲載されました

2010年9月14日

「彦根・米原・伊吹山方面の医療と歴史・文化を学ぶ」と題し、８月２６日（木）～２７日（金）の２日間、宿泊研修を実施しました。その中の訪問先の一つである地域包括ケアセンターいぶきでは、医学科３年生の松本有美さんが、往診に同行させていただけることになりました。センター長の畑野先生のご厚意により、往診先の患者さんの血圧測定や触診を体験させていただくことができ、松本さんはすごくいい経験になったと喜んでいました。その時の様子が中日新聞に掲載されました。

松本有美さん感想文（抜粋）

・・・。患者さんのほうがよく診察方法を知っておられて、最後には「頑張って良いお医者さんになって下さい」という激励までいただいて、身の引き締まる思いがしました。往診からの帰路、畑野先生は道ばたで会った人から必ず声をかけられ、畑野先生自身もその方の生活を把握した上で声をかけかえす、という光景を何度も目にしました。私は、どちらかというと家庭医や総合診療内科など、地域に密着してその地に根差した医療をするような医療を理想としているのですが、畑野先生はまさにその医療を実践されていて、私の理想とする医師像を体現されている素晴らしい先生だと思いました。・・・

新聞　2010年（平成22年）8月27日（金曜日）　びわこ 18

びわこ版

滋賀医科大生

地域医療の現場を実感

湖東、湖北の施設で研修

滋賀医科大（大津市）の学生四十四人が二十六日、地域医療に関する研修で、湖東・湖北地域の医療拠点を訪問した。施設を見学したり、先輩医師の話を聞いたりしたほか、往診に同行して、実際の地域医療を体験する学生もいた。（森若奈）

畑野センター長（右）の指導のもと細江さんに声を掛けながら血圧を測る松本さん＝米原市下板並で

米原市春照で医療と介護を提供する「地域包括ケアセンターいぶき」では、畑野秀樹センター長（四）もの案内で院内の診察室やリハビリ室などを見て回った。沖縄県の離島で地域医療に携わった、同センター医師白井恒仁さん（三）もの体験談にも耳を傾けた。

往診同行を希望した医学科三年の松本有美さんは、畑野センター長と山間部の同市下板並に向かった。娘宅で療養する細江フデさん（九三）と、畑野センター長とのやりとりをそばで見守った後、松本さんも血圧計測を体験。細江さんから「いい先生になってください」と声を掛けられ、笑顔を見せていた。

松本さんは「患者さんから教えてもらうことも多い。畑野先生が手を握って近くで話されていたのが印象的でした」と、地域医療の現場を実感していた。

同大では、学生が卒業後も県内に残り地域医療の担い手となってほしいと、二〇〇七年から一里親一制度を導入。卒業生や地域で活躍する医師らが学生の里親になり、学業や進路の相談に乗るなど支援している。今回の研修は里親との交流も兼ねて行われた。

つなぐ医療

「患者さんから学ぶ」

記事掲載許諾済

中日新聞　8月27日（金）

「里親GP」の取り組みが、新聞に掲載されました

2010年4月15日

医師不足の中、本学を卒業して地域で働く先輩医師が「里親」となって、地域医療の担い手となる意識を高めようとする取組「里親ＧＰ」の事業が紹介されました。

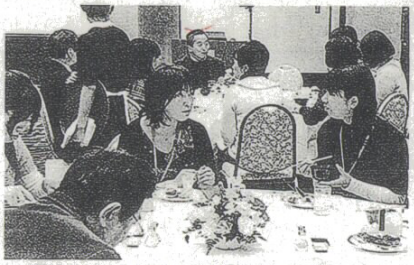
学生へのインタビューや宿泊研修の様子が掲載されています。

中日新聞　平成22年3月30日（火）朝刊　（第3種郵便物認可）

先輩が学生の「里親」

地域に若手医師を　滋賀医大の取り組み

医師不足の中、地元の医大を卒業した若手医師の流出を食い止めようと、中部地方の各県は引き留め策に知恵を絞っている。滋賀県では、滋賀医大（大津市）を卒業して地域で働く先輩医師が「里親」となって、学生との結びつきを深める事業に取り組んでいる。（小西敦紀）



懇談会でふれあう「里親」の先輩医師と学生＝滋賀県草津市で

里親事業は、医学部の一、二年生が対象。卒業生の医師が定期的な懇談会で食事をしながら近況を話し合う。

先輩医師の姿を間近に見て自身の将来像をイメージし、地域医療の担い手となる意識を高めてもらう狙いだ。二年前から募集を開始。現在、学生五十一人と里親四十四人が登録している。ヨットやテニスなど共通の趣味でつながるペアもいる。

医学科一年の上野亜希さんの里親は、子育てしながら働く四十代の女性医師。上野さんは「毎日の仕事の様子や、出産後の職場復帰など具体的に聞くことができて、ためになる」と先輩の体験に耳を傾ける。

年一回、登録した学生が一泊二日で県内の医療機関を回る研修旅行もある。琵琶湖に浮かぶ人口四百人の島での巡回診療の様子を見学したり、医師不足で閉鎖した病棟など、大学の講義では見ることのできない地域医療の現場を知ることができる。

「島の診療のことはまったく知らなかった。役立つことができれば」「医師不足の実情を身近に感じることができた」と学生からも好評だ。

ペア組み懇談会で交流　研修旅行も

「役立ちたい」「実情身近に」

研修旅行で病院のリハビリ施設について医師から説明を受ける学生たち＝滋賀県湖南市の甲西リハビリ病院で

里親学生支援委員の堀田和史准教授（衛生学）は「大学内で学生が接する医師は、ほとんどが研究者。学生は研究者とは違う医師像を求めている」と、意識のずれを埋める取り組みの意義を語る。

滋賀県の人口十万人当たりの医師数は一〇六・八人と全国平均の二三四・五人を下回る。滋賀医大の卒業生のうち、県内の医療機関で働いている医師は、研修医を含め過去五年間の平均で46％。堀田准教授は「状況は厳しい。即効性はないが、十年は活動を積み重ねたい」と、地域医療の人材育成に意欲を燃やす。

つなごう医療⑬　中部の最前線

中部各県も引き留め策

三重県は昨春から、御浜町の紀南病院に設けた「地域医療研修センター」で、研修医がへき地の患者宅に出向く「ふるさと訪問」を試みている。地元に愛着を持ってもらおうと柳田「丸山千枚田」での田植え、地引き網体験も計画する。

三重大などが中心となって六年前に設立したNPO法人MMC卒後臨床研修センターも、研修医と病院、医師会など関係団体の連携を強める活動を続けている。二十八日には、県内の研修病院の合同説明会を開き、県内外の医師たちが参加した。

岐阜県では二〇〇八年度から医学部生を対象に、揖斐川町の診療所で一泊二日のセミナーを年五回開催。医師の診察を見学して、現地の実情ややりがいを知ってもらう。

福井大付属病院は〇四年秋から、高浜町の和田診療所と連携、「地域の教育診療所」として、医学部生や研修医を受け入れている。同町から賃金援助も受けており、医師不足解消の役割を担う。

長野県は〇七年度、県内で勤務を希望する若手医師らに、意向に沿った医療機関を紹介するドクターバンクを設置。「医療過疎地で経験を積みたい」「豊かな自然の中で働きたい」などと希望する若手が集まる。これまでの登録者は県内外の七十八人で、このうち四十二人が就職した。

浜松医科大は〇九年度に、地域医療を志す医師の養成プログラムを開始。ホームステイや地域行事で住民とふれあい、テレビ会議システムで地域で活躍する医師の姿を学ぶ。

石川県では〇八年度から、県内の高校生を対象に、大学教授や医学生に話を聞く「医学部進学セミナー」を開催。研修医に臨床研修先を紹介する「明日のいつも夜八時、九時ごろに病室をのぞいてくださり雑談をして帰られました。疲れておられるでしょうに、いつも優しい笑顔でした。看護師さんも明るく接していただき、暗くなりがちな私たちを元気づけてくれました。臨終は早朝でした。先生がわ一つない白衣で、夫をみとってくださったことを覚えています。最期の時期に、病院で温かく接していただいたおかげで、私も立ち直れたと思います。（三重県＝女性・62歳）

中部各県の「里親」

意向に沿う機関紹介

三重　へき地での訪問研修

優しさが支えに　診察中に無駄話

ハンディ外来

八年前に夫をなくしました。六十一歳でした。そのときお世話になった病院の先生や看護師さんにはいろいろ思っていたのですが、男性の医師は触診の間、ずっと看護師に無関係な話をしてばかり。看護師さんは力ないまま、ぼーっとして相づちを打っていました。

こちらも高いお金を払っているのだし、もっと真剣に診てほしいと思いつつ、口には出せませんでした。帰る際に看護師さんが「関係のないことばかりしゃべっていて、ごめんね」と謝ってくれましたが、もう二度と行く気にはなれません。（滋賀県＝女性・65歳）

「ホンネ外来」は患者や家族、医療関係者などが前向きに、医療への思いを語る欄です。投稿は〒460-8511（住所不要）中日新聞医療取材班、ファクス052（221）1869、上記の電子メールで。紙面では匿名とします。投稿には住所、名前、年齢、職業、連絡先を必ず記してください。趣旨を損なわない範囲で文章を簡略化する場合があります。また、中日新聞医療サイトでも掲載します。

医療取材班 ← iryouhan@chunichi.co.jp

平成２２年３月３０日（火）　中日新聞掲載　　記事掲載許諾済

「里親GP」の取り組みが新聞（全国版）に掲載されました

2009年12月 8日

医師不足が深刻化する中、全国的にも珍しい取り組みであることから11月23日（月）の朝日新聞全国版（教育面）で、「地域『里親』による医学生支援プログラム」が紹介されました。

里親の先生とマッチングしている学生の2人がインタビューに応えている記事や、プログラムの立案経緯等が掲載されています。

朝日新聞

「医学生 残って」切り札は「里親」

OBら「バンク」登録 大学が仲介して交流

滋賀医大

医師不足が深刻化する中、卒業後も地域に残って働く医療の担い手を育てようと、滋賀医科大（大津市）が、全国的にも珍しい取り組みを始めている。学生のために、地元の医療機関で働く卒業生らが「里親」となる制度で、人間的な結びつきを強めることで、地元定着を狙うものだ。文部科学省の学生支援プログラムに採択された。（浅野有美）

交流会では、学生が積極的に里親に話しかけていた＝滋賀県彦根市

京阪神のベッドタウンとして人口が急増する滋賀県は、人口あたりの医師数、診療所数、病院ベッド数とも全国平均を下回る。一方で地元の同大医学科学生約600人のうち、県内出身者は2割に満たず、卒業生の半分は県外で就職してしまう。

どうすれば、卒業後も滋賀に残ってもらえるのか。

大学側は思案をめぐらせた。実は学生の半数以上が「将来、滋賀県で働きたい」「働いてもいい」と考えていることが、07年12月の学生へのアンケートでわかっていたからだ。そこでひねり出したアイデアが、OB、OGを中心に、学生と人間的なつながりを築いてもらえる大人を地元で見つける里親制度だ。

大学を卒業して地元で働く医師・看護師に「里親」、医療関係者ではない学生支援に意欲を持つ地元住民に「プチ里親」として「里親バンク」に登録してもらう。大学側はこの中から性別や専門分野など学生の希望に合う人を紹介、メールのやりとりから始め、実際に会って話をするなど付き合い深めてもらう。夏と冬には1泊2日程度の合宿を行い、里親やプチ里親と直接会う機会を設ける。

対象は医学科、看護学科の1、2年生。現在、学生の約15%にあたる48人が登録している。9月の合宿には、盛夏期に浮かぶ人口400人足らずの沖島から医師・看護師の学生が参加した。

沖島は琵琶湖に浮かぶ人口400人足らずの沖島。卒業生34人と教員12人が加わり、公民館に併設された島唯一の診療所を訪ね、地域医療の現状を学んだ。常駐する医師はおらず、週一回、約3キロ離れた対岸から医師が船で交代でやって来る。急病人が出ると、消防団が船で対岸に搬送する。

夜は、大学の先輩でもある里親に沖島での苦労談を聞いたり、食事しながら医療の将来について意見交換したり。大阪市出身の医学科1年、島田加奈さん（20）は「沖島のことも診療所のことも初めて知った。地域医療についてもっと知りたいと思うようになりました」。

滋賀県内の公立病院で開業医をしている石橋千恵さん（46）は、子育てをしながら医師を続けてきた経験を学生に伝えたいという思いから、今夏に里親になった。「いろいろな人に助けられ医師を続けてきた。地域医療に興味を持ち、滋賀で働いてくれる人が一人でも多くいればいいと思っている」と話している。

選択肢広がった

「里子」谷村真依さん

「里親」福田方子さん

先輩医師と一対一で交流できるのがいいと思い、里親制度に登録しました。昨夏は、一緒にテニスもしました。

今年3月、医療を学ぶ合宿研修に行きました。県西部の高島市では、広い地域に、小さな診療所が一つしかないところがあり、先生が複数の診療科をかけもちしていました。出張医療もしていて、奥地の小屋みたいなところへ週一回ほど診療する。こういう地域があるんだと、初めて知りました。

福田先生には、自分の娘のように温かく接してもらっています。安心して、道路の相談もできます。里親制度を通じて、実際の医療現場に触れられて、将来の選択肢が広がりました。

奨学金支給など 各地で取り組み

医学部生への地元定着策は各大学、自治体で広がっている。多くは独自の奨学金制度だ。広島大医学部の推薦入学は、昨年度から県内の高校卒業生を対象に「ふるさと枠」を設けている。月30万円の奨学金が支給され、卒業後9年間、県内の公的医療機関に勤め、半分以上を中山間地の公立病院や指定診療所に勤めると返還が免除される。

鳥取県では、鳥取大医学部生を対象にしたもののほか、15人の枠で全国どこの医学部生でも月10万円を支給する制度を設ける。一定期間、県内医療機関で働けば返済を免除する。

医学教育だけでなく、地方の良さを伝える授業を採り入れる大学もある。福島県立医科大は今年度始めから、必修科目に福島の歴史や文化を学ぶ「福島学」を開設。知事やこけしの絵付け師など講師に招き、「福島の魅力をアピールしている。

一方、国は、医学部生が卒業後に地域医療に従事すれば返済を一定期間猶予する奨学金制度の新設を検討している。ただ、実施時期は未定だ。

自分も他県出身

滋賀医科大を卒業し、勤務医として県内4カ所の診療所で働いています。里親制度には昨春申し込み、里子の谷村さんとは月に1回ほどメールでやりとりしています。今は学業や地路の相談より、学校生活についての報告がほとんどです。

私の同級は医者ではなかったから、医者がどんな仕事をしているか、あまり知りませんでした。里親制度の一番の魅力は、地域医療の現場に足を運び、先輩医師と交流する機会を得られるところにあると思います。

私は神戸出身ですが、滋賀が大好きです。谷村さんも将来、滋賀で働いてくれたらうれしい。里親としてサポートしていけたら思います。

朝日新聞　2009年11月23日（月）　記事掲載許諾済

宿泊研修の様子が新聞に掲載されました

2009年9月28日

9月4日（金）の朝日新聞滋賀版に、9月11日（金）の京都新聞滋賀版に、「里親GP」の事業の一環である「夏期宿泊研修」の様子が、各紙に掲載されました。

医師不足の地域 医科大生が体感

沖島などで研修

医者不足に悩む地域の実情を、医者のタマゴが地域に入って見聞する――。滋賀医科大学の卒業生の医師や住民らが「里親」になって、学生を地域に迎え入れる研修が3日、琵琶湖に浮かぶ近江八幡市の沖島や市内の病院であった。

午前11時ごろ、医科大の学生34人が沖島に渡り、沖島診療所を訪れた。島に常駐の医者はおらず、週1回来てもらっていることや、急病人は船で対岸の病院へ搬送しなければならない島の実情を聞いた。午後からは市立総合医療センターを見学した。研修は4日も行う。

医学科1年の舟山玲奈さん（19）は「県内で働きたいと思っているので、沖島の実情を知って勉強になった」と話した。

沖島の生活や歴史について学ぶ滋賀医科大の学生＝近江八幡市沖島町

２００９年９月４日（金）朝日新聞記事掲載【掲載許諾済】

京都新聞　滋賀版　2009年（平成21年）9月11日　金曜日

滋賀医大「里親学生支援プログラム」研修

地域医療の実態学ぶ

地域の医療や文化を知り、滋賀に愛着を持つ医師の育成を目指す滋賀医科大学の「里親学生支援プログラム」の宿泊研修が今月3、4日に、湖東地域で行われた。1、2年生34人が参加し、地元医師会が支える沖島診療所の実態や、医師不足に苦しむ中核病院を見学。「里親」の地元医師や住民とも触れ合い、2日にわたって地域医療の実態を学んだ。（岡本壮）

◆宿泊研修日程◆

3日
沖島
↓
近江八幡市内散策
↓
近江八幡市立総合医療センター
↓
里親との交流会（彦根市）

4日
東近江市立能登川病院
↓
ヴォーリズ記念病院（近江八幡市）
↓
東近江市立蒲生病院
↓
八日市大凧会館
↓
国立病院機構滋賀病院

里親学生支援プログラム　昨年度、文部科学省の補助を受け、1年生18人の登録でスタート。1年目は湖北と湖西地域の診療所などを訪問した。本年度は1、2年生48人が登録。住民や卒業生の医師ら40人が「里親」になり、滋賀の地域医療や文化について学ぶ全国でも珍しい取り組み。

◆沖島◆

初日の3日、学生たち在400人を切る。常ちは人が住む国内唯一の湖上の島、沖島に渡った。最盛期に800人を超えた島民は、現在住む医師はおらず、近江八幡市蒲生郡医師会駐在の医師が週1回往診し船に乗ることのできないお年寄りらを診療している。学生たちは地元八民

観光ガイドの案内で沖島を散策する学生たち（近江八幡市・沖島）

もっと！近江

館に設けられた診療所を訪れ、対岸の近江八幡市に急病人を運ぶ消防艇も見学した。離島医療の一端を目に焼き付けた1年生中村遥さん（19）は、「栗東市出身だけど、沖島自体を知らなかった。滋賀にはまだ知らないところがたくさんある」。

◆里親◆

夜には、彦根市の宿泊施設で里親4人との懇親会があった。里親として初参加した上田佳子さん＝栗東市＝は、難病と闘った経験を社会に還元したいと、普段は病院ボランティアとしても活動する。懇親会では学生らと真摯しながら、患者としての体験を語った。「医師と患者との信頼関係を築くのは難しい。心温まる医療者に、学生は「たった3人でいいの？」でも、人でいいのは、その3人の確保が難しいんやろな…」とつぶやいた。同大学OBでもある井上修平院長は「将来的には300床規模の総合病院に発展させる。その時にはぜひ皆さんの力を貸して滋賀に残ってもいいかなと思うようになった。」と、学生たちに呼びかけた。

懇親会で学生に患者としての体験を話した里親の上田さん（左）＝彦根市・琵琶湖コンファレンスセンター

自分の役割考える機会

坪田准教授の話　沖島診療所のように、住民の健康を守り続ける先輩の姿や、都市部に近い地域でも医師不足に苦しむ実態を見ることができた。学生たちが、今後の自分たちの役割を考えるいきっかけになった。

閉鎖された薄暗い病棟。坪田准教授（左）は「医師が足りず、住民のための施設が活用されていない」と、学生たちに説明した（東近江市・国立病院機構滋賀病院）

◆閉鎖病棟◆

研修最後に、相次ぐ医師の退職で2病棟（計85床）の閉鎖を余儀なくされている東近江市の国立病院機構滋賀病院を見学した。「今回の研修のクライマックスです」と、「里親学生支援室長の坪田和史准教授。

閉鎖病棟の薄暗い廊下を歩き、無人のナースステーションを見る。「去年3月まで稼働していたのですが…。あと3人の医師がいれば再開できます」。

「1年生島田加奈さん（19）は笑顔で話した。

２００９年９月１１日（金）京都新聞記事掲載【掲載許諾済】

「里親GP」関連記事が新聞掲載されました！

2009年6月24日

6月21日、本学の『地域「里親」による医学生支援プログラム』の関連記事が日本経済新聞に掲載されました。

この記事の掲載にあたっては、同新聞社大阪本社から担当の記者が本学を訪問され、垰田室長に聴き取り取材がなされました。

日本経済新聞　2009年（平成21年）6月21日（日曜日）　12版　社会　38

蘇れ医療

第6部 試練を超えて ❷

地域で縦横に連携

住民も支え手、知恵絞る

病院内で異なる診療科や職種が連携する「チーム医療」を、複数の開業医が地域で実践する試みが、東京で根を広げている。

「腕が上がりました医師の会」。当初7人だった会員は10人に増え、ほぼすべての診療科に及ぶ。約20人の病院勤務医と連携し急性期から在宅まで対応する機能は「地域で横に広がった病院」（ある会員）だ。

患者紹介し合う

「透析は任せて」「内視鏡検査には自信あり」など会員の専門科や得意分野、臨床経験などをデータベース化し、患者を紹介し合う。医師不足など地域医療の

神津内科クリニックに通う国田晴子（84）は昨年夏、院長の神津仁（59）に大動脈弁狭さく症と診断され、手術を勧められた。「腕が良く信頼できる」と大学病院の心臓外科医を紹介され手術を受けた。今月初めには血栓が脳の血管に詰まる心原性脳梗塞（こうそく）を発症したが、神津の機敏な手配で血栓を溶かす治療を受け、すっかり回復した。

「優れた医師の治療を地域で受けることができ、安心できる」と国田。「出身校も経歴も専門も異なる医師が連携することで地域医療の質を高め、患者を支えている」と神津は話す。

医師不足など地域医療の危機を乗り越えようと、住民が医療機関と連携する取り組みもある。

「きょうは栄養の過剰と欠乏をテーマにお話しします」。6月中旬の夕方、千葉県立東金病院（東金市）で10人の市民を前に、研修医が話し始めた。

同病院と特定非営利活動法人（NPO法人）「地域医療を育てる会」が2年前から毎月開いている「医師育成サポーター制度」の狙い

「若い医師のコミュニケーションスキルを鍛えるとともに、市民にも医学知識を身につけたり医療現場の実情を理解してもらったりするのが狙い」と院長の平井愛山（60）は語る。

「育てる会」理事長の藤本晴枝（44）は「住民が病院に依存していては医師らの健康や医療に関する係者、行政と地域医療の問題解決を考えるとともに、医師育成のお手伝いをすることにした」と振り返る。

研修医（中央）の説明を市民が評価（千葉県東金市の県立東金病院）

話会だ。研修医が健康や医療に関する話を約15分した後、市民が一言は聞き取りやすかったか」「専門用語を分かりやすく言い換えていたか」など20項目を5段階評価する。

医師確保に協力

岩手県の藤沢町民病院も昨年2月、同様の仕組みをつくった。県立病院が廃院となり、「地域医療を守れ」との運動が実って開設されただけに、町民の関心は高い。院長の佐藤元英（54）は「医療が限りある公共の資源であることに住民が気づき、地域医療の支え手となっている」。

滋賀医大（大津市）は県内の医師や看護師が「里親」、住民が「プチ里親」になって、医師や看護師の卵に地域医療の魅力を伝える活動を昨年から始めた。現在、里親は40人。「地域医療の維持に一役買いたい」と引き受けてくれた。

その一人甲賀市の眼科医、佐藤友哉（52）は「最先端の医療現場に比べ、地域医療は地味でつまらないと思われがち。住民と深くかかわる楽しさや、やりがいを伝えたい」と話す。

担当する准教授の垰田（たおだ）和史（54）は「医学生の約8割は県外出身。山岡地の診療所を訪ねたり、名物料理を味わったりしながら、地域医療の役割や滋賀県の良さを理解して、県内に残ってもらえれば」と語る。

「住民も医療機関も行政もみな大変な状況。限られた医療資源を使ってどう打開するかを共に考えて、知恵を絞る先に道は見える」と自治医大教授の梶井英治（57、地域医療学）。立場を超えた縦横の連携が、「貧血状態」の地域医療に活力を蘇らせる。

（「蘇れ医療」取材班）

ご意見、情報を郵便かメール（iryou@tokyo.nikkei.co.jp）でお寄せください。日経ネットPLUS（http://nplus.nikkei.co.jp）でも関連情報を掲載しています。

新聞記事掲載許諾済
日本経済新聞
2009年6月21日（日）

交流の様子が京都新聞に掲載されました！

2008年12月 1日

京都新聞の社会面に　“守れ地域医療”　第２部　支えはぐくむ　のシリーズの第１弾として地域里親による学生支援プログラムでの『里親』・『プチ里親』の方と学生との交流の様子が、記事として掲載されました。（新聞記事掲載許諾済）

（第１弾）

守れ地域医療

第2部　支えはぐくむ　①

里親交流、深まる愛着

医師の卵、地元定着を

「孫みたいでした。地域の医療を志してもらえればねえ」。滋賀医科大の献体ボランティアグループ「しゃくなげ会」のメンバー松本君代さん（80）＝長浜市＝は、九月に滋賀県木之本町であった滋賀医科大の学生との交流会を思い出す。

地域の医師や看護師は「里親」、住民は「プチ里親」になってもらい、医学生に地域医療の魅力を伝える同大学のプログラム。「プチ里親」として参加した松本さんは、今年入学したばかりの学生たちに、長浜の自然や文化について優しく語り掛けた。

近くにかかりつけの医師がいて、自身を取り巻く医療環境は悪くない。それでも不安は募る。市内の病院でいつも「看護師募集」の張り紙を見掛ける。知り合いの看護師も激務で退職を余儀なくされた。「いい先生や看護師さんがどんどんいなくなってしまって」。足元に迫る危機感は切実だ。

地方の医師不足が深刻化する中、滋賀県内唯一の医大である同大学への期待は大きい。ただ学生は県外出身者が七割近くを占める。卒業後に県内に残るかは分からない。

「大学の教職員だけでは地域医療の魅力や実態を伝えられない」。プログラムを担当する同大学の埜田和史准教授（54）は、「里親」の力に期待をかける。

西浅井町の診療所に勤務して四年目の大門友博医師（33）も里親の一人だ。「一人でやる医療は診療能力や判断力が磨かれる。地域では、患者さんの顔もよく見える」。地域に支えられて積んだキャリアを基に、交流会で生の声を伝えた。

里親たちの思いは、学生にも響き始めている。

「産科っていいな」。プログラムに登録する一年生池川貴子さん（18）は九月、草津市内の里親医師の産婦人科医院を訪れ、生命が誕生する瞬間を初めて目の当たりにした。産科志望の思いが、一段と高まった。

同時に、厳しい現状も垣間見た。見学後、共に食事を囲んだ若手医師たちが次々と席を離れていった。急な出産などで病院へ呼び戻されたからだ。「医師一人だけの地域だったらやっていけるだろうか」。

それでも滋賀への愛着は深まりつつある。実家は神戸市にあるが、残って働くのもいいかも、と思っている。来年二月に高島市朽木である里親と学生の交流会が今から楽しみだ。

長浜市の松本さんは「今度は学生さんたちに曳山や桜を案内したい」と目を細めた。地域の人々が、医師の卵たちを温かく見守り始めている。

◇

地域医療の苦境が伝えられる中、住民たちが動き出している。医師や行政だけに任せてはおけない。自らが支え、はぐくみ、考える。第二部では滋賀で芽生えたそんな動きを五回にわたって追う。

（滋賀本社　岡本壮、湖南総局　江藤均、八幡支局　中塩路良平）

＝5回掲載の予定です。

地域のお年寄りと交流する滋賀医科大生。滋賀の医療の担い手として期待が高まる（9月、滋賀県木之本町、同大学提供）

地域里親による学生支援プログラム　地域医療の担い手不足解消のため、滋賀医科大が本年度から4年間の計画でスタート。本年度は1年生18人と里親38人、プチ里親8人が登録し、互いに交流して学生の地域医療への理解を深める。文部科学省の学生支援プログラムに採択されている。

2008 年 11 月 24 日　　京都新聞記事掲載　　【掲載許諾済】

【参考】

（第２弾）　滋賀県のがん医療を考えるフォーラム

守れ 地域医療

第2部 支えはぐくむ ②

患者の声 対策に反映

県がん団体、結束し訴え

「正直、滋賀は遅れている。深くおわびします」。四月。守山市であった「県がん患者団体連絡協議会」の発足式。県健康推進課の角野文彦課長(52)の率直な言葉に、同協議会長の菊井津多子さん（52）は、行政側の変化を感じ取った。

国のがん対策基本法上、滋賀は明らかな「後進県」だった。昨年度中の策定が求められた「県がん対策推進計画」は手つかずで、「県がん診療連携拠点病院」も未定。乳がん患者の菊井さんらは県に早急な対策着手を働きかけたが、動きは鈍いと感じた。

「私たちには時間がない」。従来、個別に活動していた県内のがん患者三団体に結束を呼び掛け、県のがん対策を後押しする協議会を立ち上げた。留意したのは、「建設的に議論すること」だ。

医療者側や行政にとって、患者団体はともすれば治療の不満をぶつける圧力団体に映る。菊井さんもかつて医師から「患者団体は怖い」と打ち明けられた。「個人の経験からの発言でなく、客観的なデータで思いを伝えよう」と誓った。

医師でもあり、四月に現ポストに就いた角野課長にも思いがあった。十二年前、JICA（国際協力機構）に出向し、ケニアでスラム街の住民と感染症対策に取り組んだ。当局と立場が異なる人も議論に加え、計画を自分のものに感じてもらう大切さを学んだ。「顔が見える関係をつくり、多くの人が知恵を出し合うべき」

滋賀県のがん対策に向け、関係者の結束を訴える菊井さん（左）と角野課長（中央）＝近江八幡市内

県がん対策推進計画の策定委員には、医療関係者だけでなく、患者と家族、遺族も名を連ねた。患者以外の当事者が加わるのは全国的にも珍しいが、「幅広い意見を反映させたい」と、三者の参加を強く要請した菊井さんらの意見に、角野課長も賛同した。

協議会ではがんに対する講演会も開き、延べ三百人以上の患者アンケートも行った。その結果、画一的になりがちで患者の不満が大きいインフォームドコンセント（十分な説明と同意）の検証や、予防から治療までネットを活用したがん情報の提供など、患者側の要求が高い意見を、県の計画に反映させることができた。

今月二十日にあった県のがん医療を考えるフォーラム。患者や医師、行政関係者二百人を前に、菊井さんは強く訴えた。

「がん医療は誰のためのものか。自分は何ができるのか。もう一度じっくり考え、それぞれの立場を超えて連携しましょう」

滋賀県がん対策推進計画　国の「がん対策基本法」に基づき、県は5月に医師ら17人で策定委員会を設置。5回の検討委員会を経て▽がん検診の受診率向上▽緩和ケアの推進▽患者サロンの開設―などを盛り込んだ素案を作成した。12月中に策定する。計画期間は2012年度まで。

2008年（平成20年）11月26日　水曜日　S　16版　社会2　26

守れ　地域医療　③

第2部　支えはぐくむ

病院の役割分担　周知へ

医師負担減へ患者も協力

「うちの町の病院はどうなるんだろう」。東近江市でグループホームを運営するNPO法人「しみんふくしの家八日市」理事長の小梶猛さん(62)は、能登川、蒲生両地域に住む人からこんな不安を聞くことがある。

同市は六市町合併に伴い、能登川、蒲生の二つの市立病院を抱える。経営効率化のため「一病院二施設」への統合が検討されている。背景には、深刻な常勤医不足がある。両病院では五年前の二十七人から十六人にまで減った。軽症患者が夜間や休日の時間外に訪れる「コンビニ受診」など医師が疲弊したのが原因の一つだ。

小梶さんが、そんな東近江の厳しい現状を知ったのは、二〇〇六年から五回にわたり主催した「市民が考える医療フォーラム」がきっかけ。在宅医療がテーマだったが、参加した医師から医師不足に苦しむ現状を聞いた。

運営するグループホームでは、認知症のお年寄り八人が暮らす。最期まで看取りたいと願うが、往診してくれる医師が必要だ。将来、必要な医療環境は保たれているだろうか。「地域の『医療資源』は限られている。市民が効率よく活用しないと」。思いを強める中、小梶さんは新たな行動を起こす。

東近江地域では現在、脳卒中患者の受け入れについて、病院間で役割分担が進む。「地域連携クリティカルパス」と呼ばれるこの取り組みをテーマに、新たな市民フォーラムを、来年三月に開くことを決めた。

同パスは、各病院の得意分野を生かし、医師の負担の偏りを防ぐのが目的のひとつだ。転院を伴うため患者の協力が不可欠。小梶さんはフォーラムで仕組みや考え方を説明し、一人でも多くの理解を得たいと考える。

両市立病院の事業管理者を務める中條忍能登川病院長(62)は、小梶さんの動きに感謝する。

「本当にありがたい」。

「市民とタッグを組まないと、この医療崩壊は食い止められない」。病院の実情を発信しようと、六月から「市立病院だより」の発行を始めた。常勤医の減少を伝え、軽症患者には診療所の利用を訴えかけてきた。今では、以前よりも「コンビニ受診」の数は減り、「少しずつ医療の現実を知る人が増えているのでは」と感じる。

小梶さんは言う。「医師を困らせても、将来自分たちにしっぺ返しが来る。患者側の問題には、市民の意識で解決できることもあるはずだ」

運営するグループホームで、利用者と談笑する小梶猛さん（東近江市東沖野）

地域連携クリティカルパス　東近江地域では11病院や診療所などが連携し、6月から本格実施。脳卒中などの患者情報を共有し、救命救急をする「急性期」、リハビリをする「回復期」、在宅などで療養する「維持期」に役割を分担。病院ごとに得意分野があるため、時期に応じて転院してもらう。

（第４弾）　永源寺診療所

守れ　地域医療

第2部　支えはぐくむ

④

患者さんに育てられ

その人らしい生き方尊重

午前九時、花戸貴司医師（38）の携帯電話が鳴った。「はい、永源寺診療所です」。この日、外来は休診。診療所の加入電話が転送されてきた。二十四時間、患者が連絡できるようにしている。

それでも深夜の呼び出しは年に二、三度あるだけ。「顔が見える関係だし、常に電話できる安心感もあるのか、皆さん時間に配慮してくれて助かります」

鈴鹿山脈を抱える東近江市の永源寺地区。高齢化率は約三割で、人里離れた山中に住む人もいる。診療所に通えない人も多く、車で巡回往診をする。

山田雄一さん(90)は、三日前に自宅の畑で転倒し、左胸を打った。診療を終えた花戸医師は「気を付けてや」と優しく声を掛けた。「病院なら『危ないから畑には行かないで』と言うかもしれない。でも、あの人は畑が生きがいなんです」

九年間の地域医療従事が義務付けられている自治医大（栃木県）を卒業した。勤務医時代は、今と考え方が違った。湖北総合病院（木之本町）では、小児科医として「何が何でも病気を治したい」と、休日もなく治療に明け暮れた。

永源寺診療所には八年前に赴任した。外来のお年寄りは、病気以外の話をするだけで「おおきに」と帰っていく。初めは戸惑った。

七十代の男性を在宅で看取った時のことだ。懸命に命をつなごうとしたが、老衰した夫を見て妻が言った。「先生、もうあかんなあ」。家族が死を受け入れているのに、自分は何をしているのかー。

家族に見守られ、穏やかに迎える最期もある。住民の言葉で、あらためて気付いた。「治療は必要最小限でいい。その人らしい人生を支えるのも医師の役割なんだ」

以来、患者の家族や趣味の話に耳を傾けた。人柄を把握し、やみくもに病院での検査や入院を勧めず、患者が望む生活を尊重するよう心掛けた。

ある朝、自宅の庭にキャベツやネギが置かれていた。誰が届けたかは分からないが、地域に認められたようでうれしかった。

地域医療の義務年限は四年前に終えたが、永源寺に残った。「大病院でなく、診療所でこそできることがある」。今では、息子が所属する少年野球のチームドクターや小学校で本の読み聞かせボランティアにも取り組んでいる。

地域を支え、支えられる医師の姿がある。「患者さんに育てられています」。贈り主不明の野菜のプレゼントは、今も続いている。

「おばあちゃんも畑行くの？」「草むしり程度ですけど」。往診中でも、花戸医師と患者の談笑は絶えない（東近江市）

永源寺診療所　国民健康保険診療所として一九八四年、東近江市の中心部から車で約二十分の同市山上町（当時は永源寺町山上）に開設。今年四月に花戸医師が市の指定管理者になり、公設民営となった。永源寺地区は人口約六千人。住宅の患者は五十人で、外来には一日五十人以上が訪れる。

（第５弾）　医をめぐる勉強会

守れ　地域医療　⑤

第2部　支えはぐくむ

相互理解で信頼築く

医師と患者 共に学ぶ

「医療崩壊あなたの地域は大丈夫？」「がんが与えてくれた幸せ」「医療裁判に内部告発者としてかかわって」…。大津市生涯学習センターで三カ月に一度開かれる「医をめぐる勉強会」のテーマは多岐にわたる。

主催するのは、乳がん患者でもある主婦中島陽子さん（53）＝甲賀市信楽町。全国から招いた講師による勉強会は、九年目を迎えた。「医療者と患者側の間にある壁に風穴を開けたいと思いました」。中島さんは、自らのがんが発覚した十二年前を思い返す。

医師にすべてを委ねる「お任せ医療」が当たり前の時代だった。「生死はこの人の手にかかっている」。主治医の説明だけが頼りだったが、告げられたのは「がんは除去できました」「転移はありません」など最小限のことだけ。

「私は病状を全部知りたかった」。退院後。本を読み、講演会に出掛け、短い診察時間の中で質問を重ねた。ある時、主治医が不思議そうに聞いた。「なぜ、そんなに知りたがるの？私に任せておけばいいんだよ」。対等な立場で向かい合いたかった。一年後、「今日の質問は」と聞かれるようになった。ようやく信頼関係が築けたと思えた。

「インフォームドコンセント」（十分な説明と同意）の言葉が出始めたのは、その数年後だ。医療訴訟で医療者側が負け、「患者様」との言葉も聞かれるようになった。「医師の立場が変わってきた」と感じた。乳がん患者の話を聞くボランティアも始め、医師らと交流する中で、過酷な勤務実態など医療者側の姿や思いもまた、患者に伝わっていないと気付いた。「互いを理解しあうことで、温かい医療が実現できるのではないか」と。

「権利を主張するだけでなく、医療のことを主体的に知ろうとする考えは先駆的だった」。勉強会の趣旨に賛同する石川県七尾市の麻酔科医高田宗明さん（55）は、十年前に医療の中の人権を考えるメールリストを作り、中島さんと知り合った。「治療の主役は患者。医師は人として接する上で、医療のプロとして欲する情報や技術を提供するという姿勢が大事だ」と話す。

治らない病もある。中島さんは言う。「医師は十分手を尽くした。でも、命は救えなかった。それでも『ありがとうございました』と言える関係が理想」。そのために、患者側は思いをしっかり伝える。医療者側はそれをじっくり聞く。

勉強会の終了後は毎回、参加者と講師がささやかな酒宴を開き、本音で語り合う。普通の人間関係を築くのと同じ過程が、信頼関係を生むと信じている。

（第2部おわり）

「患者側と医療者側の壁に風穴を開けたい」。勉強会が終わった後、参加者と和やかに意見を交わす中島さん（右）＝大津市

医をめぐる勉強会　2000年6月にスタート。患者や遺族、医師ら会員数は約60人で、入会は随時受け付ける。来年1月に32回目の勉強会を開催予定。問い合わせは中島さんメール y-kaze@nte.biglobe.ne.jp。

2008 年　11 月 28 日　　京都新聞掲載　　【掲載許諾済】

健康教育学習会の様子が京都新聞に掲載されました！

2008年11月25日

京都新聞の地域・総合面に、地域里親による学生支援プログラムとしゃくなげ会共催の『健康教育学習会』の様子が記事として掲載されました。（新聞記事掲載許諾済）

県内に南北医療格差

湖南 滋賀医科大が講演会

滋賀県内の医療の実態について説明する埴田准教授（湖南市）

滋賀医科大（大津市）の「里親学生支援プログラム」の一環として、県内の医療の実態をテーマにした講演会が二十三日、湖南市のサンライフ甲西で開かれた。

支援プログラムは県内の医師や住民が「里親」となり、滋賀に愛着を持つ医学生を育てる取り組み。

講師を務めた同大学の埴田和史准教授は、滋賀県は人口増加持続予測で日本一だが、人口当たりの医師数は西日本最少で、診療所数も近畿で最下位と指摘。「県立や府立の医大など自前の医師養成機関がないのは近畿では滋賀だけ」と話し、滋賀医科大と県民の結び付きを強め、滋賀のために働く医師養成の重要性を説いた。

さらに、「医師が豊富な湖南と不足している湖北や湖西、甲賀との医療格差が大きい」と話し、医療機関の連携と役割分担を進め、かかりつけ医をつくることが地域医療を守ることにつながると力説した。（岡本壮）

2008 年 10 月 24 日　　京都新聞掲載　　【掲載許諾済】